

つまずきをどう克服したか⑨（相撲②）——学習意欲をどう喚起させたか

富士吉田市立下吉田中学校教諭 広瀬 理奈

2回目の本稿では、相撲授業に取り組んだ3年間の記録を基に、特性を活かした授業をどうつくり上げていったか、生徒の興味・関心・意欲をどう育てていったかを紹介します。

初年度は「押し」を教えることで、基本動作や基本の技を身につけさせるということを中心として授業を行いました。

2年目は、「押しだけでなく、違う技も使ってみよう」という生徒の欲求に即して、「寄り」を取り入れた「段階的に変化していく生徒の欲求をすくい上げた授業づくり」を行いました。

3年目は、今までの学習の中で培われた様々な力を基に、生徒同士の関わりを1時間の授業の中に数多く用意し、特に課題発見と課題解決学習（アクティブ・ラーニング）を意識した授業展開を行いました。

生徒一人ひとりが自分の得意技を見つけ、最後まで興味・関心をもって、学び続ける意欲を喚起させる授業を目指しました。

1

授業の実際その1（各学年の授業に対する基本的な考え方）

「1年生」「押し」を中心にした興味・関心・意欲を育てる授業
授業では何をどう教えるかという、具体的な指導内容を持ちつつ、どう興味・関心・意欲を持たせるかに力点をおくことが、重要になってきます。特に1年次の導入は、このことを最も大切にしたいものです。

相撲の授業で指導者として大事

に意味を持たせること。

③「押し」を教えることで、基本動作を身につけさせること。

④生徒の気づきを大事にする

という4点に重点をおいて、相撲の授業づくりをしてきました。

「2年生」「押し」の発展と「技」の導入を考えた興味・関心・意欲を育てる授業

2年目になると、相撲の授業に対する生徒の欲求が多様化してきます。その最たるものが「押しだけでなく、違う技も使ってみよう」という欲求です。これは、授業の発展上、当然の欲求です。

生徒の欲求を充足し、楽しさを味わわせながら技術習得する授業を展開するためには、どうしても「技の導入」を考える必要がでてきます。

また、指導要領に即した内容であることの重要性を考えると、『段階的に変化していく生徒の欲求をすくい上げた授業』を創り上げていくことは、非常に大事になります。

なことは、「自分は相撲経験がないから、相撲を教えられない」というふうには考えないことです。初めて指導に携わる時は、不安も大きいですが、「相撲の特性をよく捉える」「基本動作や基本となる技を学ぶ」「困ったときには、7つの特性に戻る」（資料）ということを忘れず、相撲の素晴らしさを教え、伝えていきたいものです。

そういう不安な要素を解決するために、

①導入を工夫すること。

②展開の中で全ての動作や活動

そのような基本的な考え方をもとに、次の4点に重点をおいて、相撲の2年目の授業づくりをしてきました。

①全ての動作や活動に相撲の特性を取り入れること。

②「押し」という基本となる技で、相手のバランスを崩すことを更に意識させること。併せて、新しい技の習得につなげていくこと。

③「押し」という基本となる技に対する攻防と、生徒の気づきを大事にした課題解決を授業の中で展開していくこと。

④そのために、生徒へ「気づき」を与える言葉かけを大事にした授業にすること。

「3年生」相撲の特性を活かし「押し」を軸に学習する授業

狭い競技場所、競技のスピード、お互いの体一つの攻防、自分の重心を保ちながら、相手のバランスを崩す重心移動によって攻防が展開される相撲。授業づくりにおいて、このような相撲の特性を十分に捉え、「押し」を中心に学

資料 本校の「相撲7つの特性」

- ①礼儀を重んじて、相手を尊重する。
対人的競技である武道で、一番大切にしていかなければならない要素であると指導する。
勝っても負けても相手に対して礼を尽くすという精神を養わせたい。
- ②狭く、円形の土俵という競技場で行う。
円形という競技場は、追い込まれても、体の使い方で「さばく」ことが容易な競技場である。また、狭いことも競技をスピーディーに感じさせる一つである。
- ③裸体で行う対人的競技である。
正式な競技ではまわし一つで競技をするので、武器も胴着もなく、お互いの体一つで攻防しあい、正々堂々と競技するものである。
- ④お互いが瞬時に全力を出して、短時間で勝敗が決まる。
狭く、武器もない状態での競技なので、お互いに体全体を使って競技を行う。また、一つひとつの試合が短時間で勝負が決まる。
- ⑤自分の重心を保ちながら、相手の重心を崩しあう。
相手の力や体重を感じながら、自分のバランスを保ちつつ、相手のバランスを崩していく。「重心の移動」によって攻防が展開され勝敗が決まっていく。生活や運動にも深く関わった動きがある。
- ⑥勝敗の見分けがしやすく、生徒同士で試合を進めやすい。
勝敗の見分けがしやすく、多くの場で審判をたてながら、生徒同士で試合を行うことができる。
- ⑦誰もが関われ、わかりやすく、人との関係づくりができる競技。
競技を行なう者、見る者、全ての人が関わり合いを持って、参入、没入できる競技である。



どこでもできる相撲授業



グラウンドに土俵を描き、授業を行った



タッチ相撲



課題解決（取り組みをみんなで確認）

習すること、安全性を高める興味・関心・意欲を育てる授業になると考えます。

学習を進めていくと、わりと簡単に試合までたどり着けてしまいます。しかし、基本動作や技術を支える体力が身につけていない早い段階で、技の学習を進めてしまうと、「相撲」がもつ本来の魅力や、「相撲」という教材に求められるものが曖昧になってしまいます。また、安全性にも不安が生じます。このようなことから、発達段階や学習内容を系統的に考え、発展する授業を構築していくことが重要だと思っています。

指導要領の学習内容は盛り沢山だと感じます。何をどの順番で教えるのが相撲という教材を最大限に活かせるのか、系統的に教えていくためには何を軸に据え、1時間1時間の授業の展開を考えればよいのでしょうか。

相撲の技能の最大の特性である、自分の重心を保ちつつ相手のバランスを崩すということに主眼を置くと、やはり「押し」を中心に学習を進めることが「相撲」の

した。

3年目を迎える生徒は、それまでに得た知識や、経験によって習得した技能があります。何を知っているのか、何ができるのかということ、個別の知識と個別の技能として把握させ、知っていること、できることをどう使うか思考し、判断しそれを表現（実践）するところまで、見通しをもたせた授業を展開しました。

例えば、技を使って勝ちたいと欲求を持っている生徒に対し、技のポイントは何か、弱点は何かを話し合わせたり、簡易相撲で、勝負につながった動きは何だったのかを話し合わせたりしました。また、簡易相撲の時に、2人の動きを別々に観察し、アドバイスを担当する役割をつくり、話し合わせたりしました。

仲間と問題を発見し、解決する経験を積み重ねたことで、思考し必然的に学びの質が深まったように感じます。それは、生徒の試合の様子や学習カードによって感じることができました。また、生徒はどうしたら勝てるか、などを更

魅力を引き出すのだという結論に至りました。

2

3年次にたどり着いた方向性と授業づくりについて

1. 礼法（基本動作）をどう考えたか

武道においては、「伝統的な行動の仕方に留意し、互いに相手を尊重し、計画的に練習や試合ができるようにするとともに、勝敗に対して公平な態度を取れるようにする」と指導要領にあります。従って、1年次から礼儀作法や相撲独自の所作などについて、形式的に活動するのではなく、相手を尊重する方法やそれぞれに意味をもたせた作法を行ってきました。つまり、伝統的な行動の仕方を学習する過程で、考え方の理解も生徒に求めました。また、礼↓活動↓礼という「静から動へ・動から静へ」の学習を繰り返すことで、生徒自身が自己の感情をコントロールする力や勝敗に対する態度を身につけることも大切にしました。

に追求し、意欲をもって最後まで授業を行いました。

3. 試合や学習方法における手づくりの要素

(1) タッチ相撲Ⅱ

2年次に「寄り」を学習したことで、「はつけよい」と審判の合図後に、自分がどのように相手に組みに行くのか、ということを考えさせるため発見した相撲を、タッチ相撲Ⅰとしました。

次年度は更に、相手と距離を置く、立ち合いを意識したタッチ相撲Ⅱを実践しました。これは、強い姿勢（中腰の姿勢）から両手の平を合わせて、肩に頭を載せ四つに組んだ状態から、頭を離し、両手の平のみを合わせた状態から、合図により攻防させました。

この簡易相撲により、恐怖心のあった立ち合いが取り組みやすくなったたり、合図後、相手より先に優位な状態にするかなどを考えたりすることにつながりました。

(2) いきなり相撲

土俵の外で立礼し、お互いに中央によっていきます。審判の「はつけよい」という合図はいつかか

このように、自己の内面を高める礼を意識して活動してきました。

3年次の学習内容は、1、2年次の総復習と課題解決学習と盛り沢山です。また、生徒がペアやグループで話し合う時間も沢山あります。これらは、グループ活動の中で個々の学習を高めていくというものであり、最終段階の試合では団体戦を行います。そのため、授業の活動の段階練習や約束練習の時は、相対する2人が礼をして活動を行うというスタイルから、グループとして皆でその活動の前後に礼をするというスタイルに変更しました。活動や練習の前にグループで礼を行うことにより、一体感やその練習に対する意識が高まったように感じました。試合については1、2年次と同様、礼を行いました。

2. 授業の要・課題の発見と課題解決学習（アクティブ・ラーニング）を導入する

1年次から学んでいる相撲を、生徒が学ぶという意欲を持ち続けるためには、どのような授業展開が必要なのか常に考えてきま

るかわかりません。構えてもいない立った状態から、審判の合図と同時に試合が（いきなり）始まります。

段階的に、合図後に組む状態までの約束練習と、実際に合図後に試合を行うステップを踏み行いました。

生徒たちはいきなり相撲を喜び楽しむがら行いました。合図後に自分がどのような姿勢になればよいのか、早く強い姿勢（中腰の姿勢）になるためには、相手より早く内に入るにはどうしたらよいのかなどを考え実践していました。

4. 課題解決学習に不可欠な学習カード

課題発見と課題解決学習（アクティブ・ラーニング）を支える一つの方法として、学習カードの工夫が不可欠となりました。

生徒たちが積極的に読み、書き、ふり返って考えるカードが、学びの質と学びの深まりに係るのだと考えました。学習カードは前年度までのものをベースにしますが、同じものではなく、今ま

で学習してきた内容やこれから学習する内容を考慮し、身につけさせたい力や生徒の関心なども考え合わせ作成します。

生徒が体験したこと、考えたこと、話し合ったことが記され、更に次への目標まで見通せるカードにしたいと考えました。

5. 学習用具と場所

(1) 土俵

本校は部活動が盛んに行われており、放課後の練習だけでなく、朝練習も常に行っているため、相撲の授業の場や用具について悩みました。このため、土俵づくりをするには他の先生方の理解や協力が必要の条件でした。グラウンドでは、部活動に支障がなく安全管理もしやすい場所を探し、毎年10個の土俵をつくり、授業を行いました。

しかし、3年次の授業では、台風や荒天で土俵に水がたまり、なかなか乾かない状態が続きました。そこで、作成した土俵はあきらめ、休み時間にグラウンドの別の場所に土俵を描き、土俵の中を少し掃いた状態で授業を行いました。

3 授業を通して 見えてきたこと

かようにでも実践していけるとい可能性を知りました。

1. 成果

- (1) 「押し」を中心に学習したことが、大きな投げ技への連想や欲求につながらず、相撲の授業を通して怪我もなく、意欲を持ちながら最後まで授業を行うことができました。
- (2) 1時間目のオリエンテーションから、相撲に対して興味や関心が高いことがわかりました。
- (3) 課題発見と課題解決学習により、生徒自身が考える力やコミュニケーション能力の大切さに気づき、相撲以外のさまざまな活動の中でも活かそうとする態度や行動が見られました。
- (4) 試合の時に、生徒から「うまい」という声がたくさん上がりました。これは、ただ体が大きく腕力があるだけでは相撲は勝てず、相手に勝つために体の使

た。今までグラウンドで学習する時は、作成した土俵以外で授業を行ったことがありませんでしたので不安でした。しかし、休み時間に急遽作成した土俵でも、今までと同じように授業を進めることができました。これは私自身にとって大きな収穫となりました。

(2) 用具

本校は相撲パンツがなく、柔道の帯がありました。私は、相撲パンツを着用しないで相撲の授業を行った経験も、柔道の帯を使った授業経験もあります。

相撲パンツがない状態で授業を行うことへの不安と、使ったことのない柔道の帯に戸惑いを感じました。そして、安全性や生徒の興味・関心・意欲という面や、女子の相撲に対する「恥ずかしい」という負のイメージを払拭させることから、相撲パンツで授業を行いたいと考えました。本市の教育委員会に問い合わせ、借りる準備をしました。ちびっ子相撲で使う小さなサイズしかないということで断念しました。しかし、教育委員会より、前任校に借りたらど

うかというアドバイスを受け、学校長に相談しお借りすることが決まり、1年目から相撲パンツで授業を行うことができました。2年目から相撲パンツが予算化され、毎年少しずつ購入し、増やしていくこととなりました。これも、生徒たちの一生懸命な姿や相撲の授業に向かう生徒の活気ある活動を、様々な先生方が応援してくださった結果だと感じ、ありがたく思っています。

3年次では、2年生の授業と3年生の授業が同じ時間帯になり、2年生はグラウンドで相撲パンツを着用し、3年生は格技場で柔道の帯を結んで行いました。これも、私にとっては初めての経験でした。柔道の帯で果たしてできるのか、生徒の反応は、生徒の活動はどのようになるのかなど、頭を巡らせることが沢山ありました。帯の結び方（柔道着と同じ結び方）が難しく、少し時間がかかりましたが授業を進めることができました。

柔道の帯は手軽さから言えばプラスチック材料だと感じました。しか

(9) 基本動作時や試合を通して、相撲によつて身につく体力を実感でき、また、体力を試すこともできました。

(10) 相撲の授業を通して、相手を尊重することの大切さや、自身自身の心のありようについて変化を感じている生徒がいまいました。そして、学校の他の活動分野の中にも相手を尊重しているという態度が見られました。

(11) 大相撲に興味を持ち話題になったり、家族で相撲について話したりする場面が増えました。相撲がコミュニケーションの和を広げました。

2. 課題

- (1) 学習内容の量や質について研究が深まれば深まるほど、年間指導計画の見直しや、場や用具についての検討が必要になってきます。
- (2) 相撲の本来の純粋な楽しさや、相撲という教材に求められていることを、生徒の実態やニーズの面からも研鑽し、学習内容を考えていきたいです。
- (3) 技能を指導する時に、自分自

し、帯と体の間に隙間ができ、力が伝わりにくい印象を持ちました。また、衣服の乱れを気にする生徒が見られ、全力で行えない状態になりました。そのため、今まで思いきり自分の力を出していた生徒の動きに制限が加わり、何か閉塞感のようなものを感じました。しかし授業が進んでいくと私の思いとは反対に、生徒は自分の動きに制限が加わることにより、どうしたらよいかと考え、動きを変え始めました。相手をどう押したらよいのか、帯をどのように持ち、体をどのように使ったらよいのか考え、実践する態度へと変化していきました。

つまり、生徒自身が発見し、やりにくそうだった状態を解決しようとして、違う動作を始めたのです。

このように指導する側も生徒自身もイメージ通りにいかないことでも、生徒自身が解決する力を持っています。どんな単元も場作りや用具は重要です。しかし、学校の実態に合わせ、場や用具を準備し、その中で学習内容の量や質、学び方を工夫していくことで、い

身（指導者）がある程度習得していないとならないと感じます。なぜなら、特有の体の使い方であったり、力の使い方が難しかったりするからです。経験者が身近にいる場合はよいのですが、いない場合にはどのようなして習得したらよいのか、そういうネットワークを広げていく必要性を感じます。

(4) 相撲は、体の使い方が技や試合の決まり手などをしめしているものもあるため、説明をしている時に用いた表現や言葉が、正しいのか判断に迷う時があります。生徒は、言葉によって理解したことにより、技能向上に結びつく場合があるため、自分自身（指導者）が知識を深めなければならぬと感じます。

試行錯誤の連続でしたが、「押し」「寄り」を中心にした3年間の「学校相撲」の流れをつくることができたと思います。

これからもより楽しい相撲の授業を目指したいと考えています。